

# 李登輝逝くの報—頭を深く床に伏すのみ



倉  
渡辺 わたなべ  
利夫 としお

李登輝、この大いなる魂に初めて触れた日のことは忘れもしません。平成十九年（二〇〇七年）三月末のことでした。

旧知の中嶋嶺雄さんから、李先生がアジア・オーブン・フォーラムの招きで訪日される、その際には拓殖大学を訪れてもいい旨の伝言をうかがい、わが胸が高まりました。拓殖大学は、その草創期に後藤新平や新渡戸稲造など、李先生が敬愛してやまない人物が活躍した大学です。

平成十九年の時点で、私は拓殖大学の学長職にありました。李先生に直接お目にかかってご挨拶をしなければ礼を欠くと考え、大学側の責任者として李先生にお目にかかるために台北に赴きました。

初めてお会いする私は、当然のことながら大変に

緊張しておりました。しかし、玄関で私を迎えてくれた李先生と握手したその瞬間、実に不思議にも緊張感私の躰からすべて吹っ飛んでしまいました。初めて会うものをも悠揚に包み込んでしまうこの人物の中に、私は何か偉大なるものを感じました。

「拓殖大学にはまいますよ」

最初の一言でした。あとはいろんな話でした。人生の中で本当に幸せな時間なんて、そうそうあるもんじゃないのですが、あの時間はまぎれもなく私の最も幸福な一瞬でした。

同じ年の五月三十日に先生は訪日されました。六月七日の午前中に兄上の眠る靖国神社に参拝され、その後、一二時三〇分頃に拓殖大学にお着きになりました。理事長以下、大学の幹部は全員緊張の面持

ちでしたが、私が李先生をお連れして大学の会議室に入るなり、

「やあ、拓殖大学のみなさん、お招きありがとうございます」

と大きな第一声。この一言で場所の雰囲気がかたになごみ全員が笑顔になったのです。どうしてと思わされる実に得難い能力だと動じたものです。

そうなんだよなあ。あの包摂力、異質なものをまですを大きく包み込んでしまうあの力、これは李先生がもって生まれたものかもしれませんが、あの分断社会・台湾における李先生の政治的人生が造形したものだとも考えられます。

「省籍矛盾」とも「族群社会」とも呼ばれる、異質的で分断的な台湾社会を統合に向かわせるにはどう



汐止公学校のとき、1つ年上だった実兄の李登欽と（右が李登輝先生）

したらいいのか。李先生を生涯にわたって懊悩させ、人生のエネルギーのほとんどを注ぎ込んできたテーマが台湾の社会統合です。李先生が抱えもってきた巨大なテーマが、あの人物像となっているんだと私は想像します。

逝去の第一報が私に届きましたのは、自宅で少々深酔いしていた夜分に袖原正敬さんから届いた電話によってでした。

話し終えて電話器をおき、三〇分ほどさらに飲みつづけて何を思ったのか、私は目の前にあったメモ帳に、

「李登輝逝くの報―頭を深く床に伏すのみ」

そう記して、また深い酔いに入っていました。



淡水中学時代、腕前は2段だったという剣道着姿の李登輝先生。